

2. 寄稿：首楞嚴心經（シューランガマ心經） 柴田芳明（公財）横浜工業会 副理事長

乙巳の変によって成立した中大兄王子と鎌足が主導する新政府は、中大兄王子が篡奪したとの非りを受けるのを避けるため、軽王子を即位させ孝徳大王の下で「改新の詔」を發布した。その主意はそれまでの豪族連合国家の仕組みを改め、土地・人民の私有を廃止し大王中心の中央集権の律令国家を目指していた。しかし、既得権益に固執する豪族たちの抵抗を受け、その政治改革は停滞することになった。

653年、この停滞を打開すべく新政府は唐に第二次遣唐使を派遣した。その一員に学問僧として鎌足の長男の定恵や道昭がいた。

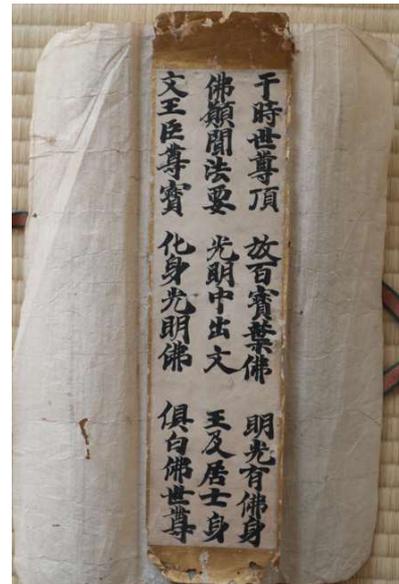
道昭の唐滞在は8年間に及んだ。この間、玄奘三蔵に師事し、法相教学を学んだ。玄奘は印度のナーランダ学院にて学んだ時のことを重ね合わせ、この異国の学僧・道昭を大切にし、玉華宮の同室で一緒に暮らしながら、直接懇切丁寧に印度から持ち帰った梵字（サンスクリット語）の仏教原典の漢訳作業をした。それまで鳩摩羅什たち（異邦人）の漢訳仏典があったが、玄奘は梵字を漢訳するとき中国語に相応しい訳語を新たに選び漢訳し直した。その後、鳩摩羅什たちの漢訳仏典を旧訳といい、玄奘の漢訳仏典を新訳という。玄奘が死ぬ直前に完成した経典の中核である「大般若経」をとってみると旧訳と新訳の違いが判然とする。旧訳では観音経の趣意を意識して観世音菩薩とされているが、梵字の「アヴァローキテーシュヴラ」は自由自在に見ることができるという意味なので新訳の観自在菩薩の方が正確である。

第四次遣唐使の帰国情報を得た道昭は還暦を迎えた玄奘に帰国の希望を申し出た。そこで、道昭は玄奘に倭国が唐に倣い、豪族連合国家から中央集権の律令国家に平和の裡に移行するために必要な経典について問うた。玄奘は印度から持ち帰った膨大な梵字経典のうち唐が既に中央集権の律令国家を実現している状況に鑑み、漢訳を後回しにしていた梵字の「シューランガマ経」とその要約版の「シューランガマ心経」のことを思い出した。玄奘は道昭が倭国に帰国することを寂しく思っていたが、印度から帰国した時の自らの体験と重ねながら、餞としてこの二つの未漢訳の梵字経典を道昭に渡した。このような経緯によって玄奘が印度から持ち帰った膨大な梵字原典の中のこの二つの経典は世界中で倭国にのみ唯一存在することとなった。このうち「シューランガマ経」については既に鳩摩羅什が「首楞嚴三昧経」として漢訳していたが、この漢訳について玄奘は前述のとおり異論を持っていた。8年間、玄奘の下で大般若経の漢訳を手伝っていた道昭はこの点についてよく理解していた。なお、このような経緯から、中国において伝わる「首楞嚴経（大仏頂経ともいう）」は偽経であることが判明している。

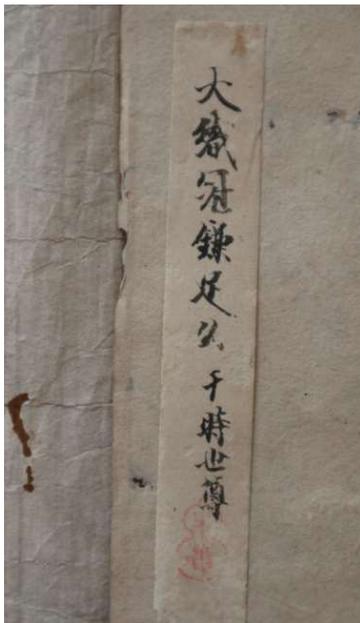
661年、道昭は帰国後、玄奘から託された二つの梵字原典を携えて鎌足の元に行き、鎌足から漢訳作業を急ぐよう指示を受けた。

梵字の「シューランガマ」は首楞嚴と漢訳され、その意味は「一切事究竟堅固」ということである。すべての物事に対して源流を極め絶対に破滅することがないことを意味している。この二つの梵字原典は菩薩たちが大衆に対して布教活動を行う場合の行動指針を示していた。この行動指

針が観世音菩薩となるのか観自在菩薩になるのかによって布教のあり様が異なる。観世音菩薩の首楞嚴とすると、悩める世間の一人一人の声に耳を傾けることになるが、これに対して観自在菩薩の首楞嚴とすると、何物にも執着することなくどんな微細な無明でもとことん見抜き無碍自在に観察して法を説き行動することが一切事究竟堅固の究極の菩薩道となる。このことを玄奘から学んでいた道昭は観自在菩薩の観点で漢訳した。首楞嚴という言葉は為政者が自分勝手な意図をもって動かそうとしても動かすことのできない行動規範である。今日的に言えば国民から信託を受けた為政者が守らなければならない憲法のようなものである。残念であるが現在現存する証拠資料は鳩摩羅什による漢訳經典である「首楞嚴三昧經」と今回紹介する鎌足の写経と伝えられる要約版の「首楞嚴心經卷末大字三行」のみである。



「于時世尊頂 放百寶葉佛 明光有佛身
佛願聞法要 光明中出文 王及居士身
文王臣尊寶 化身光明佛 俱白佛世尊」



この「首楞嚴心經卷末大字三行」の資料は①「大織冠鎌足公 于時世尊 牛庵印」の初代畠山牛庵の極札を持つ。また資料裏面には「吉野鑑の内」と書かれている②現在我が国において界線の引いてない写経は長屋王の願経以外確認されたものはない。③本写経の紙は古代の特別に用いられた斐麻紙である。

鎌足は道昭から受け取った首楞嚴経と首楞嚴心経のうち首楞嚴心経を自ら写経した經典を「天智天皇から賜った藤原家」の家憲とした。

この家憲を藤原の姓を引き継ぐ次男の不比等に渡した。こうして藤原の姓は不比等の子孫のみに許され、君臣尊寶の精神を引き継ぎ、代々藤原の朝臣を名乗ることになった。また、化身光明の文字から不比等の娘に光明子と名付け、聖武天皇の皇后となった。また、文王臣尊寶の「文」と化身光明佛の「化」の文字から「文化」という言葉が生まれた。こうして我が国の律令国家成立に道昭漢訳のこの二つの仏教經典は大きな役割を果たすことになった。

また、白村江の戦いの敗戦はそれまで停滞していた中央集権の律令国家体制へと一気に舵を切ることになった。この情勢変化に応じて称制していた中大兄王子と鎌足は敗戦国である「倭国」を「日本」に国名変更すると共に、大王の敗戦責任を回避するため大王の名称変更を検討した。

当時、太宗の後宮に入り、太宗の亡き後、太宗の子である皇帝高宗の後宮にも入宮していた則天武后（当時は武照と名乗る）は655年に高宗の皇后となり、亡き太宗を「天皇」と称し自らを太宗の皇后である「天后」と称した。こうして皇帝高宗に成り代わり事実上の最高権力者となり垂簾政治を行っていた。則天武后は660年に新羅の請願を入れて百済の討伐の軍を起し百済を滅亡させた。その後663年に唐軍と新羅連合軍は倭国・旧百済連合軍と戦った白村江の戦

いにおいて勝利に導いた則天武后は唐の最高権力者に昇り詰め、中国の歴史上最初で最後の唯一の実質上の女性皇帝となり、「天后」と名乗り亡き太宗を「天皇」と名乗っていたことに鑑み、称制していた中大兄王子と鎌足はこの戦勝国である唐に敬意を表して唐の例に倣ってそれまで名乗っていた「大王」を「天皇」と改名することを決めた。これが我が国における「天皇」の語源となった。しかし、則天武后亡き後、男性優位国家の中国において「天后」「天皇」という言葉は意図的にかき消され、従来の「皇帝」と「皇后」という名称が復活し、「天皇」という言葉は日本においてのみ存在することになった。また中大兄王子と鎌足は豪族連合国家である「倭国」は敗戦とともに消滅し、戦勝国である唐の律令政治に敬意を表して唐の例に倣って全面的に律令政治を取り入れた律令国家を目指した新生国家「日本」に生まれ変わらせようとした。こういう経緯で、中大兄王子は律令国家新生「日本」の初代の「天皇」に就き、天智天皇となったのであった。

このことの根拠として、白村江の戦いの敗戦後に「倭国」が唐に派遣した遣唐使の事例が如実に示している。

665年に唐が敗戦後の倭国の実情把握のために派遣した唐使の劉徳高たちの目的は旧唐書本紀（945年に成立）などに拠れば666年に行われる高宗（39歳）の封禅の儀（即位式）への参列を求めた使節であるとされる。この真実は不明であるが、665年の遣唐使は来倭していた唐使の劉徳高たちを唐に送る送唐客使とは言うものの、高宗の封禅の儀式典参列を意図した使節である可能性が高い。このチャンスを捉えて白村江の戦い以降に悪化していた唐との関係改善を、倭国側が求めていた動きであると推測される。

667年に来倭した唐使の司馬法聰の帰国（熊津都督府＝旧百済国の占領地へ帰還）を送る送唐客使を派遣した。

669年に天智天皇と鎌足は新生「日本」の国号で唐との関係の正常化を図る目的で、唐の高句麗平定の祝賀を述べに河内鯨を大使とする遣唐使を派遣した。唐は百済・高句麗滅亡後、百済・高句麗の故地に羈縻州を置き、新羅にも羈縻州を設置する方針を示した。これに対して新羅は旧高句麗の遺臣らを使って、唐に対して蜂起させた。この新羅の動きに乗じて日本と唐との関係改善が軌道に乗り始めた。

この665年から669年の3回の遣唐使は、唐との和平交渉を目的としていた。

なお中大兄王子が斉明大王亡きあと称制した理由は新羅・唐との戦争を目前にして万一の敗戦の責任を危惧した鎌足が中大兄王子を守るために進言したことによって行われたものである。

また『旧唐書（945年成立）』の記述にみられるよう、「倭国」は「自ら其の名の雅ならざるを悪（にく）み」、「日本」の国号を用いるようになった。『続日本記（797年完成）』には大宝2年（702年）の遣唐使が、唐側の用いた「大倭国」という国号を退け、「日本国」を主張したという記述がある等いくつかの説が存在するがこれらの説は後世になって編纂されたものに過ぎない。

669 年、鎌足死去
671 年 天智天皇崩御
672 年 壬申の乱勃発

しかし現在の歴史学者の通説では「日本」を初めて名乗り、「天皇」を初めて名乗ったのは天武天皇とされているという反論があったので、この反論に対して次のように反論したい。

天智天皇の治世以降、文武天皇統治の 702 年まで遣唐使の派遣は行われなかった。つまり天武天皇は国内問題である豪族連合国家を中央集権国家に転換し律令国家体制を固めるのに奔走していた。このため唐に遣唐使派遣する余裕などなかった。このことは天武天皇の治世において対外的に「日本」の国号を用いる場面はなかったし、唐に敬意を示して「天皇」を称する必要も存在しなかったことを意味している。

この白村江の戦いの敗戦教訓から学び、先の大戦において戦勝国である米国を中心とした連合国（国際社会）に対して、国名を「大日本帝国」から「日本国」に変更し、現人神であった「天皇」は人間宣言を行った。こうして新生「日本国」は戦勝国である欧米の民主主義（新憲法）を導入することになった。

また白村江の戦いの戦勝国である唐と新羅の亀裂から学んで、戦勝国である連合国間の東西冷戦を巧みに利用して敗戦後の日本再建を成し遂げた。

道昭が漢訳した長文の首楞嚴経は現在失われているが、鳩摩羅什漢訳の首楞嚴三昧経が現存するので観世音菩薩の観点で漢訳されている菩薩像を観自在菩薩の観点で読み替えることができる。首楞嚴三昧経は仏教を布教する「一切事究竟堅固」な勇気ある菩薩たちが観世音の立場に立って衆生たちの悩み苦しむ一つ一つの声を解決するために行う救済活動情報を収集して具体例として羅列された経典となっているが、首楞嚴経はその羅列された菩薩たちの衆生救済行動のあるべき姿を観自在の立場に立って新たな行動規範を明示する経典となっていた。こうして首楞嚴経は現実世界の国家の指導者（為政者）のあるべき姿（行動規範）を提示している。

〔補 1〕 本稿は、京都大学教養部（文学部哲学科美学美術史教室出身）の上野照夫教授の講義録である。

上野照夫先生は植田寿蔵教授の下で研究生活に入った。その後、国策研究機関・東亜研究所（近衛文麿総裁）が設置され、七帝国大学の若き美学美術史研究者を対象に我が国の文化の世界に誇れる優越性の研究を目的としたテーマを募集した。これに応募した上野照夫先生の研究テーマは次々採用が決まり、莫大な予算を取り付けて毎年 1 名の文学部哲学科美学美術史教室で新規採用された後輩たちと共同研究した案件 100 件以上の研究成果報告書を作成し、東亜研究所に提出して当時の著名な先輩学者方による厳しい審査を受けて正式に採用された。

京都大学の先輩である池田勇人さんは戦争中 3 年間に渡って大蔵省主税局国税課長の職であったが、日本国の財政破綻を目の当たりにして、各省の若手官僚たちを集めて戦後の日本の財政再建プランの勉強会を開いていた。池田課長の実家が広島島の造り酒屋であったため、酒が十分に振舞

われたこともあり、各省の有能な官僚たちが集っていた。このとき京都大学の先輩の近衛文麿総裁から池田課長を紹介され、その勉強会で話をするように依頼されたので、敗戦が濃厚な状況に対処するためには古代の「白村江の戦い」が日本再建の先例として参考になるとして本稿の研究成果を講演したことがあった。特に戦勝国の文化を取り入れ日本の文化と整合性をとることが肝要であり、これが新しい日本へ改革する機会になることを強調して講演した。その後もたびたび池田課長から講演の依頼があり東亜研究所に提出し正式に採用された研究成果を次々と講演したとの上野照夫教授の講義であった。

ところが敗戦とともに米軍が上陸したとき、東亜研究所の研究について戦争責任を追究される危険を懸念した政府は東亜研究所に集められた研究成果を残らず焼却処分にした。これに伴い文部省は各大学の研究者の手元にある同研究所関連資料をすべて焼却するよう通達を出した。上野教授は提出した研究資料は純粋に文化研究を行ったものであり、戦争責任を追究されるものでないとの信念と、戦争に駆り出された共同研究者たちが戦場から帰還した時に彼らに渡す責任があるとの判断から自宅に持ち帰り封印した。終戦から 23 年経つが誰一人として帰還する者がいなかった。

上野教授はこの年還暦を迎え教養部の教壇で講義する最後の年であったことと、学生たちが 70 年安保改定を目前として浮足だって教養部の授業に熱が入らない雰囲気となっていたことに対して、大学側から学生が興味を持つようなカリキュラム改革をせよとの強い要請を受けた。そこで思い切って自宅に封印していた資料をカリキュラムに組み込んで、「京都大学 1968 年度教養部芸術学Ⅱ日本美術史」の一年間の講義が始まった。

上野教授は OHP でスクリーンに東亜研究所に提出した研究報告書に添付した作品の 100 点以上の写真画像を学生に紹介して、その一点一点について報告内容の骨子を講義した。しかし、残念ながらこれらの作品は戦後行方不明になっていた。上野教授は学生が講義の多岐にわたる内容を記録・記憶するのは困難かもしれないが、100 点以上の写真画像を見せて記憶させることは 20 歳代前後の学生の高い記憶能力からみて容易ではないかと考え、これに力点をおいて講義が続けられた。

私たちは子供時代の写真をみて忘れていた当時のことを思い出すことがしばしばあるように君たちの脳に写真画像を埋め込むことによって、この講義を受けた学生たちが人生の何処かで紹介作品に出会った時に、忘れていた講義を思い出すように仕組むと話されていた。こうして君たちが出会ったこの行方不明の作品を公開してほしいと遺言に近い講義が行われた。

私も美術品に強い興味をもっていたこともあり、東京美術倶楽部、京都美術倶楽部の業者間交換会の会主たちから、平成になって東京、京都の御屋敷が相続や固定資産税の問題によって細分化され潰された蔵の中から、訳の分からない美術品が大量に持ち込まれて買い手が見つからなくて困っているとの話があった。会主はプロの目で判断して美術品の出し値を言いますが、それに参加者が追いついてこなかった場合に引き取り義務が生じる。こうして引き取った美術品や、自ら落札した美術品で購入者が見つからない美術品を見せられた中に約 20 年間をかけてほぼ 100 点以上の上野照夫教授の紹介作品が次々に出現した。そしてその美術品見ると上野教授の講義の断片的な記憶が蘇り、それを手掛かりにネットで検索すると詳細な記憶が蘇ってきた。こうした作品の一部は既に各国立博物館に寄贈した。今後も受け入れて頂ければ全作品について寄贈する予定である。

【補 2】 本作品（首楞嚴心經卷末大字三行）の全体の写真画像から紙の表面は斐紙（雁皮）で加工されているが、裏から光源を当て透かして見ると内部は荒い大麻の繊維が確認できる。麻紙（大麻紙）は荒くて筆の運びが悪く滲み易い。これを補完する目的で薄い斐紙（雁皮）で表面を加工し筆の運びを良くして文字の滲みを無くしている。これを斐麻紙というがネットで検索しても出てこない。

麻紙は古代では黄麻紙等の存在が確認されているが斐麻紙は現在確認されているものは他に例がない。当時としても非常に手間がかかって特殊な上層部（鎌足クラス）でないことが使用することができない。本作品に用いられた斐麻紙は古代の歴史上極めて貴重な紙である。このことが確認出来る写真画像として参考までに次の5点を添付した。この点について、上野教授が強調して講義したことを思い出した。なお延喜式の規定には麻紙は麻布 600 グラム相当に対して斐（雁皮）180 グラム相当を混合したものであるとの内容の記載があるが、その製造方法は不明である。



最後に本作品の解明に文化庁の田山方南氏の愛弟子で文化庁主任文化財調査官、文化財保護審議会専門委員(書蹟部門)の経歴をもたれる財津永次先生に手伝っていただいたことを申し添えます。

(2025/01/19 更新)